

子どもの社会力をどう育てるか P152 ~ 174

0 . 重要な、早い時期からの社会力形成(p152)

近年は、社会力の形成に最も重要な他者との相互作用が、子どもが育つ生活世界から失われつつある。環境の変化が、子ども達の他人との出会い、交流、一緒に汗を流す場を奪ってしまった。

そこで、大人がしなければならないことは、生まれて直後から可能な限りの子どもとの相互作用に務めることである。本来「社会力」は生涯に渡って形成されていくものではあるが、ここでは「子どもの社会力」に限定し、生まれた直後から 3 歳ごろまでの第 1 ステップ、4、5 歳頃から 20 歳過ぎまでの第 2 ブロックに分けて考える。

1 . 「子どもを育てる」とはどういうことか。

・子どもを育てるということ(p154)

私たちはわが子に対し、さまざまな期待をしながら、また思い通りにいかないことの繰り返しをしながら子育てをしている。しかし、ややもすると「子どもの社会力」は、放っておいても自然に、社会的動物に育つものだと考えているところがあるのではないだろうか。

ヒトの子も環境が整っていなかったり、働きかけが十分でなかったりした場合、まっとうな社会生活(言語習得、社会的役割取得、社会的相互行動)を送れるようにはならない例を既に学んだ。

子どもが育つ環境が著しく悪くなってきている現代において、我々大人は、人間は社会的動物であることから、「社会力のある人間を育てる」ということを肝に銘じておく必要がある。

・「子どもを大事にする」ことの中身(p156)

「子どもを大事にする」ということの中身において、わが国においては、その子に余計な苦勞をさせないと考えているフシがある。ところが欧米先進国においては、その子の年齢に応じて、その時期その時期にやれることは何でも体験させることとらえている。彼らにとって子どもに何もせずに過ごさせるのは「虐待」しているように映るのである。社会力を育てるためにはどちらの育て方が理に合っているか、答えは自明である。

・「教育」によって子どもは育つか(p158)

子どもの社会力をどう育てるか

わが国では「教育」に対する期待がきわめて高い。「教育」こそ人を育てるのであり、教育は教え込むことであると考えてもいる。したがって、教育に対する期待感や信頼感が高いことは、社会の不都合も教育の力で解決しようとするこももつながってくる。

ところが、教育は人間の社会力の基礎的資質ができた上で成り立つものと考えた方がよい。ゆえに「教育」しなければ人は育たないのではなく、「学ぶこと」で社会生活に必要な事柄を身につけていくのである。

私たちは、子どもを、社会力のある人間に育てなければならないのであり、そのために、他者との相互行為を豊かにし、他者と共同で行う実体験を豊富にする必要があるのである。

2. 子育てする大人の責任とは何か

・ヒトの子を育てるといこと(p160)

ヒトの子にとって大事なものは、社会のほかの人たちと円滑に社会生活を送れるようになり、社会の運営に積極的にかかわれるようになることである。

そのために大人がしなければならないことは何か考えていく。

・欠かせない子どもとの応答(p161)

ヒトの子の社会力の形成についても、脳や人間としての完成度を高めるのと同様に、ヒトの顔を見分ける能力、ヒトの声や動作を模倣する能力、ヒトの心を推察する能力などをフル稼働させることが大切である。そのためには環境、特に<ひと>環境との相互作用が大切である。

つまり、赤ちゃんの周りにいる大人が赤ちゃんに対して、抱いたり、声をかけたりなどの働きかけをすることであり、また赤ちゃんが、泣いたり、笑ったりと周りに働きかけることである。これらの働きかけに、適切な応答をしていくことが、ヒトの子を人間として育てる上で欠かせないことである。

・応答することが大人の責任(p164)

「応答する」ということを子育てに引きつけて言えば、大人が子どもの働きかけにきっちり応答することである。つまり、子どもと継続的に相互行為をすることである。子どもと適切に応答をするということは、子どもの行為に含まれる意図にかなう応答を時を移さず、すぐに返すことである。このことから考えるとテレビに子守をさせるなどというのは、言語道断と言える。社会力の形成にとって大人の応答がいかに重要であるかを改めて認識してほしい。

3. 家庭と地域における大人の責任

・求められる子どもへの応答(p166)

子育てにかかわる大人の責任とは、子どもときちんと向き合い、子どもが仕掛けてくる

子どもの社会力をどう育てるか

様々な行為にまっとうに応答することである。それは幼児のみならず、青年期においても同様である。成長の過程にある後続世代に対する大人の責任とは、何よりもまず、彼らの言動に対してまっとうに応答することである。

・父親たちの生活態度を変える(p167)

統計によると、諸外国と比べて、わが国の父親は、家族と共に過ごす時間が少ない。それはまた、わが子と一緒に過ごす時間をなおざりにしていることも意味する。子どもの社会力を育てるためには、父親はこれまでの生活態度を変え、家や地域で子どもたちと一緒に時間を過ごすことに喜びを感じるようになることが大切だということを知ってほしい。

・子どもとかかわることを喜びにする(p170)

明治時代以降になり、男は外で働き、女が子育てをすることに価値が見出され、それは戦後においても、変わることなく現在まで至っている。そのことを裏付けるデータとして統計によると子育てを楽しみにしている父親は、わが国では2割を切り、諸外国と大きく水をあけている。日本人は従来の考えを転換し、子育ても父親の大事な役目であると考え、それが父親自信の喜びにつながるまで進出していく必要がある。

・学校と地域に積極的に関与する(p172)

子どもへの応答ということで最後に挙げるのが、地域住民すべてが、学校教育と地域活動に積極的にかかわるべきだという提案である。歴史を振り返ると、明治の頃は地域住民の財産であるという性格であったが、時代が進み、高度経済成長がはじまり進学競争が激しくなった頃から、住民と学校のかかわりが薄くなった。しかしながら、近年の問題行動発生など、学校のみで解決できない問題への対応、学校評議員制度、総合的な学習の時間など、学校は、住民の参画と協力をなしに成り立たない側面が出てきた。今こそ、住民が学校を巻き込んだ地域活動に積極的にかかわり、地域を舞台に子どもたちとともにさまざまな活動を始める絶好のチャンスである。